

渡辺隆泰は明治三十四年十一月十四日、東八代郡一宮町に父周年、母わかかの長男として出生。地元小学校を経て、大正九年三月旧制県立日中学校を卒業。

その後上京、大正十五年三月早稲田大学高等師範部英語科（現教育学部英語英文科）を卒業した。大正十五年春、直ちに旧制都留中学校の英語科教師として奉職、月俸百円であった。大正から昭和初めの不況の時代月俸百円はいい給料であった。



こうして都留中学校に奉職した渡辺は昭和三十二年三月で県財政再建計画による公務員定年制規定により五十五歳で同校を定年退職した。

渡辺は定年退職まで一回の移動もなく同一校に三十二年間奉職ということは稀有のこととして話題をま

た。渡辺は三十二年間という長い間都留中、高と郡内子弟の教育に当たったのはいかに彼がこの学校を愛していたかがわかる。若き日の渡辺先生は、洒落気がなく、いつも髪をボサッとしていて豪猪（ヤマアラシ）に似ているので時の生徒は彼を「ヤマさん」とよんでいた。

ヤマさんの英語は昔流のジス・イズ・ア・ペン方式の英語で一年に入学して初めて習う英語の時間は、たいへん楽しいものであった。授業中の彼は、英語ばかりでなく、世間話も得意で時の世相をよく話してくれた。又兄弟を教えているので弟

には、兄はよく勉強できたのにお前はだめだと言ってからかった。この時代の先生は教え子一人一人の家庭環境まで熟知していて彼はこの村の村長の息子とか、何屋の息子という具合にみんな知っていた。

戦争中の軍国主義の時代大方の先生は、軍に協力的発言が多いなか、渡辺の偉いところは、生徒たちに、あまり軍隊のことにはふれ

ず青春を楽しく勉強する若者等へのはげましの授業であったと、卒業生は一樣に言っている。ここにヤマさんの人気ナンバーワンの原因があった。こうしたヤマさんは、こよなく酒を愛し、若いときは失敗もあったようであるが、全てはこの人柄によって許されたそうである。

昭和七年八月、彼は甲府の輿水房吉、もとの三女「たけ於」と結婚、四男一女を授かり家庭的にもめくまされた家庭であった。

こうして都留中一途に教えた彼も英語科主任、舎監長、教務課長、戦後は進駐軍通訳もした。こうして新制高校になってから教頭、副校長、校長と同校での昇進は異例なこととして当時は話題になった。

渡辺は在任中進学する者の学習指導、就職を希望する者の企業の紹介等本当に親身になって生徒の面倒をよくみてくれた。渡辺の偉いところは、卒業後も教え子のよき相談相手であったことでも有名である。

今度ヨーロッパ旅行に行きます」というような時には、ヨーロッパに行くならフランスにも行くだろうからといって、パリに行ったら、そこには谷村出身の中二十一回卒業生の内田宏君というフランス大使がいるから、その人を訪ねなさいといって紹介状を書いてくれ、これを持って行きなさいというように本当に優しい先生であった。

一つの例として、パリーの街角や人物を独特のフォルムで描き、海外在任作家の最高峰の一人として活躍した洋画家の中二十四回卒業の増田誠（谷村出身）が初めてパリに行くとき、渡

辺に挨拶に行ったところ、それではといて当時フランス大使館二等書記官をしていた内田先輩を紹介され、パリに在任中たいへんお世話になったそうであるが、このときも渡辺はこころよく内田に紹介状を書いて頑張ってくいって増田を激励したそうである。

以後義理と人情に厚く、親分肌の増田はパリにあって同窓生が訪ねたときな

ど親身になって世話をしてくれたそうである。

このように、多くの都留中、高校の教え子が国の内外に活躍するようになった今日、渡辺にとってもそれは教師としての一つの誇りでもあったろう。

またある時、渡辺に週一回の自宅で個人レッスンを受けていた生徒が、明日英語の試験があるというとき、「先生、明日どんな問題が出るのですか」と聞いたところ、渡辺は「馬鹿者そんなことを教えることが出来るか」といって何にも教えないかったそうであるが、当日試験になって問題をみるところ数問題のうちの一つに昨夜勉強した問題が含まれていて驚いたという話をもう時効だからいいだろうといいつて話してくれたが、優しさと厳しきをもって渡辺の面目躍如たるころがうかがえる。

三十二年間の教え子一万名近い人達は退職に際して、住宅建築費の一部として多額の金を彼のために寄贈した。このようなことをしてもらった先生はそう居るものではない。

昭和二十九年大月市誕生を記念して大月短期大学と付属高等学校が創設された。彼は引続き同短期大学講師となると同時に付属高等学校校長に就任、約十五年間、校長の職にあった。

彼は県立、私立と教職にあること四十七年間の長きにわたり、郡内教育に一生をささげた。これがヤマさんのヤマさんたる所以である。

この功が認められ、昭和三十六年、山梨県教育委員会より教育功労者として表彰、昭和四十七年十一月勲四等旭日小授章を下賜された。

昭和五十八年十月二日八十二歳で永眠。また彼の葬儀には多くの教え子が参列、ありし日の恩師をしのび別れをおしんだ。菩提寺は故郷の一宮町石村の臨濟宗妙心寺派石林寺である。

執筆者 平井 茂

漢字博士 石井 勲

漢字博士石井勲は、大正八年九月二日、父博、母小萩（禾生出身）の長男として、現笛吹市石和に生まれる。父博は、富浜町鳥沢出身の警察官で石井が生まれた頃は、石和署に勤務していた。その後谷村警察署長（現都留警察署）となり、石井が都留中学二年生の時、他界した。

昭和十二年三月都留中学を卒業、大東文化学院本科、高等科卒業後、昭和二十三年母校山梨県立都留高校の教壇に立つ。昭和二十五年

東京都八王子市立第四中学校教諭。昭和二十六年、東京都八王子教育委員会指導主事。昭和二十七年十一月、小学校の漢字教育に疑問を抱き、全日本国語教育協議会で漢字教育の重要性を発表。自身の漢字先習論（石井方式）を実践しようと、昭和二十八年、新宿区淀橋第一小学校に赴任、昭和三十六年、実践の成果を「私の漢字教室」として刊行、文部省の圧迫に耐え兼ねて、昭和四十二年退職の後、大東文化大学幼少教育研究所で普及に尽力。英才教育と

受け取られるのを嫌い「適時教育」と称した。同大学幼少教育所長を経て、日本漢字教育振興会会長、国語問題協議会副会長、昭和四十八年に、第六回世界人間能力開発会議で金賞を授賞。昭和五十九年、同大学附属青柳幼稚園長を辞し、石井教育研究所長、松下政経塾講師を兼務。平成元年「幼児期における漢字教育指導法」を、樹立した功績で菊地寛賞受賞。



石井は、「一教育学者の歩み」で次ぎのような自己の人生を語って居られる。「数学者になろうと京大に入学した湯川秀樹博士は、満点の筈の最初の試験が酷く悪いのに納得できなかつた。すると、この教授は、教えた通りの解答でないと、正答でも減点する事が判った。と、博士は、面倒な手続きを取って物理学科に転

じたのである。もし博士がこの教授に出会わず、目指す数学者の道に進んでいたら、ノーベル賞受賞は有り得ず、従って敗戦で打ち拉がれた日本国民を鼓舞することも無かつた事になる。こう考えると、不幸な目に会うのも満更捨てたもので無いと思われ、自分の中学時代を想起した。私は、小学校から、中学に掛けて数学が得意で好きだった。

（国語、特に漢字は苦手で大嫌いだ。～）中学では数学が代数と幾何とに分かれたが、どちらも好きで、特に幾何も証明が考えられる幾何が好きで得意だった。だから中学五年の時、湯川博士が嫌った教授と同じタイプの教師に出会うまでは、数学の教師になるのを好むと思っていた位であった。所が、この教師は考

え数学を暗記させる学科に変え、数学を大嫌いの学科にさせたのであった。反対にこの頃、素晴らしい先生に出会った。北條明頼という漢文の先生である。教頭先生だったので、四・五年になって教えて頂いた。

それまでつまらなかつた漢文が楽しい学科に一変した。先生は、県で唯一の高校教員免許状所有者であった。県に一人とは不思議に思われるだろうが、当時は四年に一度、文部省が検定試験を行うが、一人の合格者も出ない事があるくらい難しかったからである。

先生は博識の上に情熱家であった。私の今日があるのは先生のお蔭が大きい。特に有り難く思うのは課外授業に漢文法を教えて下さった事である。当時我国に漢文法を講ずる人も機関も殆どないに等しい状態であった。私はこの頃、国文法と英文法が好きで得意であったから、漢文法と合わせ

て三つを比較研究する楽しさを知った。小学生のうち母を亡くし、中学四年で父を失った私は、直ぐにも中学を退学し、本居宣長に倣って独学で行こう、と考えた。宣長は、真淵に唯一度だけ合つて教えを受けただけ。後は手紙によって指導を受けただけだったので、あれ程の大業を成就した。便利な今

の世の中では、宣長以上の事が出来る筈だ、と考えただけが大きい。所が、尊敬する北條先生から大東文化学院の存在を教えられると忽ち変心。ここで学ぼうという気になったのである。ここで六年間学べば、先生と同じ高校教員免許状が無試験で取得出来るからである。」

昭和四十八年（一九七三年）五月、アメリカの古都フィラデルフィアで開催された、第六回人間能力開発世界大会で、石井先生は「幼児期の漢字学習は、幼児の知能を高める働きがある」というテーマの研究発表を行った。この発表は「人類の進歩に貢献する有益な研究である。」と言う趣旨の賞状と共にゴールドメダルを授与された。アメリカ人間能力開発協会のグレン・ドーマン博士は、「一国の教育を根底から覆すような教育法が、その提唱者の生存中に世に受け入れられる事は先ず無い。所が日本ではこの教育法が既に三百

もの幼稚園で取り入れられているという。他の国ではとても考えられない事である。生存中に実践されるのを見る事が出来た石井教授は、羨ましいほど幸福な人」と、祝辞を述べている。石井は、永年に亘る漢字教育の研究と、幼稚園・保育園での実践から「石井式漢字教育」を確立。その教育は現在、「豊かな言葉を養い子供の知性や感性を養う」実績を挙げている。幼児からの漢字教育を説いて半世紀、平成十六年十一月八五才にて永眠した。「幼児は漢字で天才になる」「幼児のための日本塾」等著書多数。

参考文献
一教育者の歩み。
山梨県人物人材情報リスト2002年。
国語国字、第百八十五号

執筆者 井上 文次郎

日本を代表する企業人京王グループ総帥、小林甲子郎は、明治四十年（一九〇七年）四月七日、父亀鷹母ふくの二男として、初狩町中初狩八二五に生まれる。家は、「酒屋」の屋号で知られる酒造業を営む初狩村の名門である。甲子郎は「酒屋」の二男として出生したが、長男晴徳が夭折したため、実質的な長男であった。父亀鷹は、明治二十六年から四期十一年間と、大正七、八年に初狩の村長を務め、大正三年には郡議会議員、明治三十六年から大正十二年の間県議会議員として県政に貢献した政治家であり、都留電燈二代目社長として活躍した実業人である。甲子郎は、同郷出身の日本電気元会長の小林宏治氏とは都留中学の同級生である。当時の同級生によると、小林宏治氏は「えらく優秀」、甲子郎については、「大人しくまじめ」の印象が深い。また 甲子郎は宏

治氏とは仲が良く、宏治氏が松本高一年、甲子郎が都留中五年生の夏休みに、大月から伊東へ無銭旅行に出かけたという。甲子郎は、都留中学を卒業、慶応義塾大学法学部に進み、政治学科を専攻。昭和六年三月卒業と同時に東部鉄道に入社した。鉄道界入りを決めたのは、当時、山梨県出身の鉄道事業家の活躍が目覚ましかったからと言う。



東武鉄道は、東山梨郡平等村（現笛吹市）出身の根津嘉一郎の経営する会社である。ほかにも関西の阪神急行電鉄は葦崎出身の小林一三、富士山麓電気鉄道は東八代黒駒村出身の堀内良平、東京地下鉄道は東八代郡浅間村出身の早川徳次：と、キラ星のような先輩が鉄道界で活躍していた。昭和十二年に一時、東武鉄道を退社、郷里に戻り、都留電燈の取締役に就任、翌十三年八月、再び上京して、当時の京王電気鉄道に入社した。以来京王帝都電鉄とともに歩んで行く。

京王電鉄に入社時は、駅夫、切符切り等、下積みの仕事にも精を出していたと語り草になっている。戦中は、私鉄界の離合集散で十九年に合併して誕生した東京急行電鉄時代の京王支社庶務課長、戦後は、二十三年六月に分離してスタートした京王帝都電鉄の労働課長となった。京王電車は木造が幅を利かせ、編成も二両程度の時代であった。昭和二十四年六月に取締役に、二十八年十月には自動車部長、三十二年五月常務、三十八年十一月専務、四十二年十一月副社長、四十四年五月社長を経て、五十年五月会長、五十年六月から相談役に就任した。

その間、数多くの業績を残した。一つは京王線をそれまでの新宿―京王八王子から、北野―高尾山口の八・六キロ延長（高尾線）、相模原線としてそれまでの調布―京王多摩川を、京王多摩川―多摩センターまで九・八キロ延長した。地下鉄都営十号線との相互乗り入れを推進し、調布から都心に直行出来るようにした。また 鉄道事業の安全保安に努め、井之頭線、京王線とも列車総合制御装置をコンピューターを使ったTTCシステムに整備した。旅客サービスに力を入れた。関東地区では初めての通勤電車の冷房化を進めた。一企業の社長としてだけでなく、四十九年五月からは、関東鉄道協会会長として広い視野から、鉄道事業に取り組んだ。

■ホテル建設に情熱 もちろん京王帝都電鉄だけでなく、京王グループの総帥としての活躍も華々しい。三十二年京王自動車、京王映画、三十六年ホテル熱海園、三十九年京王サービス、四十二年京王百貨店、四十四年関東バス、四十五年読売ランド、西都開発、京王不動産、四十六年東急リクリエーション、四十七年桜ヶ丘ゴルフ（社長）、新宿南口駐車場、四十八年京王プラザホテル（社長）、五十一年京王プラザホテル高松、五十六年京王プラザホテル札幌、多摩京王自動車と数多くの会社の取締役就任している。特に新宿ターミナルにオープンした、京王百貨店創設の推進と、副都心に建てた四十七階建ての京王プラザホテルの建設に情熱を傾けた。京王プラザホテルには、五十六年南館を建設、五百室を増室して全館を完成させた。経済人としての甲子郎の功績に対し、昭和四十三年、運輸大臣賞、昭和四十五年、藍綬褒賞、昭和五十二年、勲二等瑞宝章を受賞された。また、甲子郎は絵画観賞・ゴルフなど多彩の趣味人でもあった。東洋一の超高層ホテルを建設したとして、「実業界」一九八九年九月号にて「追悼」「いまも生きる甲州魂の研究―武田信玄ブームで見直される甲州人」で、甲子郎の人物像と、遺業が賞賛されている。甲子郎は、平成元年六月二十七日、京王グループの総帥として、企業の行く末を見守り惜しまれつつ、八十二才の生涯を閉じた。甲子郎の家系からは、実弟、東部ガス会長穴水三郎氏・甥、元東京ガス専務、西室陽一氏・東京証券会長、経済再生会議議長・元東芝会長、西室泰三氏など、我が国の経済界の総帥的リーダーを輩出している。



鈴木新一は明治三十九年十一月三日、大月市七保町葛野で生まれた。父鈴木堅作・母政代の長男であった。父堅作は東京神田の私塾敬勝館で学んだ後、明治三十四年農商務省の管轄する京都蚕業講習所を経て、農商務省の蚕業技師として山梨県庁に勤務した。そのため一家は甲府に居住し新一は六切小学校に入学した。

この時転校してきた山主茂夫と同級になり、以来晩年まで交友が続き、「鈴木新一遺歌集」の刊行に中心的な役割を果たしてくれた。大正九年四月甲府商業学校に入学、再び山主と会う。新一は在学中しだいに文学に傾倒していき、当時甲府に在住していたアララギ派の歌人中村美穂先生に師事し、投稿するようになった。「アララギ」の誌上に初めて載った作品は次の一首であった。

○朝雨のけぶれる庭に梧桐の幹は一もとあをく立ちたり

大正十年の頃であった。

そして大正十一年五月、山梨日日新聞の懸賞文芸に応募し、佐々木信綱選で「天位」に入選した。

○落日の光こもれる竹藪に竹を切らむと我が立ちにけり

甲府商業の学内でも文芸活動が盛んで、「甲商十六人集」という合同歌集「雲雀」が発行されていた。その中の一首

○納屋裏の今朝の寒さよ下駄の歯に

凍りし土を砕きては見し

次に大正十一年十二年の頃の作品を取り上げてみよう。アララギ派の歌人が目指した万葉調や写実の歌風が次第に現われてきていることに気付く。

○更くるままにいよよ高まる溪川の
水音さびしみいねがてず居り

○眼にうつる影さへあらぬ大海に

うつつ世遠く思ほゆるかも

○墓のべのあやめは今も咲くらむか

春さき来れば汝が身思ほゆる

大正十四年三月、甲府商

業学校を卒業した新一は、上京して「銀座松屋」に勤務、かたわら日大高等師範科二部に通った。就職によって生活の安定した新一は作歌活動にも力を注いだ。

○うつつなき心に似たり砂の上

逃ぐる小蟹を我迫ひまはず

○番頭と吾を呼び捨つる客もあり

今はそれにも馴れにけるかも

この頃の歌風は石川啄木を想わせるものがある。新一がいかに啄木に心酔していたかが遺歌集の弟妹による追悼録に記されている。

そして間もなく都会生活の過労から身体の変調が起こり急速に蝕まれていった。父は「歌など作っている駄目だ。歌など作っていると身体をこわしてしまおうぞ」と言っていた。

○我が病癒ゆるならむとたのみ居し

春さへむなし暮れはてにけり

○この病癒して見せむと夕風

海に小石をなげにけるかも

大正十五年一月、父堅作が胃潰瘍にて死去した。

○帰り来し家にはすでに父あらず
ただにむなしき門川の音
○臨終（いまは）まで我がの帰りを待ちわびし
父の屍を今し抱くも
○幼児の一人を背負い一人ひく
母は極に遅れ給へり
男五人、女三人の子供を残された母政代はその時三十九歳であった。
○七人の児等をはぐくみふる里に
老いなむ母かあわれ尊し
○向山なぞへに一つともる燈の
燈影恋ふしきこの夕かも
○月月の金さへ今日は送り得ぬ
我をたよりに生くとふ母は
昭和三年九月、新一の病氣はいよいよ悪化し勤務に耐えることが出来なくなり帰郷せざるを得なくなった。
○我ながらいささかあわれ我が一世
店員にして終ると思へば
○行李の底に本納めつつうらさみし
癒えて帰らむ我ならなくに
昭和三年十月三十一日未明、最後の時が訪れたが、母の話や弟妹たちが残して

いる追悼の記録によると、「兄の死ぬ二日前あたりでしたか、兄の声で「タクボク、タクボク」と言っているのが聞こえました。その時は私は全く何のことだか判りませんでした。母が新一は石川啄木の名を呼び続

けているのだよ」といい、石川啄木が当時の若い者にとって憧れの的だったことを教えられました。」と述べている。啄木は大正元年に二十六歳で病没している

ので交流はなかったが、同じような境遇から常に意識し目標にしていたものと思われる。

次に、同級生であり「鈴木新一遺歌集」の編集刊行に尽力した山主茂夫の「葛野の里」を読んでみよう。

「彼の家は前に述べた山裾道より一段低い河川敷につづく所にある。彼はこの家の奥の西南向の座敷にいる

時が多かったのであろうか、その前面は当時桑畑であった。

○桑畑切り払はれて前山の地肌寒けく見ゆるこの頃

この部屋が結局彼の「終焉の間」となった。・・・

彼はもはや動きもままならぬ身を一人寂しくここに横たえている時が多かったのかもしれない。

○鋤の音たえず聞え来ふる里の
家の病み臥りさびしも我がは

私が最後に彼と語ったのもこの部屋であった。その時もどこからか「サクサク」と単調な鋤の音が休みなくきこえていた。」（追悼録・より）

短歌に憧れ、持てる才能を燃焼し尽くした鈴木新一は、二十二歳を一期として世を去って行った。
そして友人や同人たちが五十五年という歳月を経て鈴木新一を世に出す遺歌集を刊行したのであった。

参考資料

鈴木新一遺歌集

岩まつ記 鈴木 博

執筆者 井上 豊

井上市朗は、慶応元年（一八六五）二月二十一日、甲州郡内領下花咲崎宿臨本陣、中大屋十世として、父井上市三郎・母いちの長男として出生した。幼名は坊太郎と称した。

幼児より、父市三郎が、甲斐絹商として、京浜間を往来するの同行し、十九歳のとき（明治十七年）、父と死別、その後遺業を継承、外国商館に入入りして、輸出に興味を持つ。



井上製絹所全景



明治十七年、郡内織物会社を設立、同業有志と、甲斐絹の改良をしたが、外人間に不評のため嘆嘆、職工の技術、機械の優劣、及ば

ずとして、明治二十一年、農商務省の留学生として渡米、カリフォルニア州サンフランシスコ市の産地、及びニューバジニア州バタソンのカレッジで、機械、染色、燃糸などを学ぶ。

また、ホワイト商会の織物部に入社して研究す。

明治二十五年帰朝、工場を新設し、初めは、米国向け、広巾甲斐絹を製出し成功、次いで紋甲斐絹（尺八巾タフタの代表品）を製織し好評を得る。M39・フランス式パンサージ機（ジャカード）を購入、またアメリカ燃糸機を購入して、輸出に全力を注ぐ。注文陸續として絶えなかった。

明治三十九年、ロシア国ウラジオストクに販売店を設置、末弟井上道太郎を支店長として勤務させた。北方に販路を獲得したが、収支償わず断念する。

明治二十二年、二十三年頃、本郡東部にて、アメリカへ白羽二重の代表品として、半練甲斐絹（巾尺三）及び勾配甲斐絹を輸出したが成果の満足を得ず、これを改良輸出した。

明治二十七年、広里村（大月町）井上市朗・大目村岡部忠恕・甲東村和智貞四郎・巖村古家広泰・古屋平作・藤田重三郎・藤田胸太郎（衆議員議員）の諸氏揃って、北部留輸出織物組合を組織し、井上市朗が組合長となる。

主な輸取出引商会 ローレンソール商会（米国、印度向け）、輸出織物中、紋

甲斐絹（マフラー）紋朱子の製織に要する「ジャカード機」の使用は、井上工場が初めてである。（明治二十一年購入「ジャカード機」は、十五台、一台の価格は、五十円、運賃十五円）

井上工場で製織した織物

輸出
・米国向 広巾物 紋甲斐絹（タフタ代表品）紋甲斐絹（袖裏20インチ巾）
・印度向 広巾物 紋甲斐絹朱子玉虫、紋タフタ、紋羽二重、紋壁
・英国向 広巾物 紋朱子ワイシャツ生地
・フランス向 広巾物 マフラー、紋タフタ、ワイシャツ生地

内地向 広巾物 袖裏地（明治より）座布団地、ハンカチーフ、マフラー富士絹、ハンカチーフ、マフラーは、名花印中西儀兵衛商店で「三越」に納入する。本郡における朱子製織の初めは井上市朗の考案による。また、袖裏地、座布団ともに広里村 井上市朗工場を初めとする。

写真織
井上製絹工場では、ジャカードの技術を駆使し、写真織にも着手、「アルプス超えのナポレオン」・「モナリザ」・ミレーの「落穂拾い」などを織り上げ、明治四十年のロンドン勲業博覧会で一等賞金杯を受けた。（山日新聞「郡内機業を考える」より）

燃糸
明治25・26年頃、井上製絹工場にて、八丁燃糸機により、自家製織物用の燃糸をつくりだした初めてである。

明治28年、輸出の増加により、燃糸の供給を盛んにするため、同工場で、燃糸の作業に従事していた、市朗実弟天野延太郎氏が養家先、同上花咲の自宅に、独立の燃糸工場を経営、「天野屋燃糸工場」を創設、八丁燃糸機、七、八台にて操業、数年後京都の田淵工場より、アメリカ式燃糸機2台（1200鍾）（1日1台の燃り高1台2匁）を購入、桐生製作所より、イタリ式5台、（900鍾）（1日1台の燃り高3匁5分）を購入、新式新鋭の機械により、燃率を向上し、輸出織物の生産増加に伴い、需要増加、大いに将来を嘱望されたが大正七年急逝。

本郡にての燃糸は、明治25・26年頃 井上市朗工場で自家製織物用の燃糸を八丁燃糸機によりつくり出したのが初めてである。（甲斐絹同業組合史より）

市朗は、大正元年に「広里村十七代村長に就任、村政発展にも功績を残した。また、業界にあっては、山梨県知事藤村県令の命により、県内産業振興のため、甲斐絹同業組合を設立、初代組合長として人力車で猿橋の組合事務所まで、車夫を雇い勤めた。

市朗の経営した井上製絹

工場は、中央線の開通後「汽笛一声新橋を」の歌同様、中央線鉄道唱歌があり、その歌詞に歌い込まれたほど、工場法の適用を受けた、県内では著名な工場でもあった。

市朗は、郡内織物の近代化に貢献した先駆者として、幾多のエピソードを遺し、昭和十六年一月二十九日七十六才の生涯を閉じた。

【エピソード】
市朗の渡米時のエピソードについては、当時を知る資料として参考になるものが多い。

横浜からサンフランシスコまで、汽帆船で百日を要し、船内では尾崎岳堂による英会話の学習をした。サンフランシスコに上陸すると、領事館員より、日常生活でのマナーの教育があり、「特に日本人の鼻紙の使用について注意され、ハンカチーフで、鼻をかむようにすれば、ポイ捨ての苦情が来ない」と、注意されたという。

また、留学生は半年間、アメリカの生活様式を学ぶため、市朗は、領事館の輪旋で、大陸横断鉄道の技師長ドイツ人の工学博士・夫人はフランスの貴族の家で「ホームステイ」をし、市朗は鼻筋が高く西洋人風の容貌であったため「フランク」の愛称で夫妻から寵愛され、毎晩パーティーという欧米の上流社会の生活に直接触れたので、生涯大きく影響があったという。

在米時は日曜日、夫妻と共に教会の日曜礼拝をする習慣であったので、帰朝後も、甲府教会小野善太郎牧師の説教の開催や、自宅を洋館にし、椅子での生活を送ったらしい。

また、慈善運動に熱心であったホームステイ先の夫人の感化もあったのか、明治四十年の大洪水の折には、上下花咲の被災者に、実弟の天野延太郎氏と謀り、被災者各戸に、大人子供に拘らず一人1日白米3合を、1カ半年の間、下花咲は、中大屋で、上花咲は天野屋で無償で供与するなど慈善運動を実践した。

市朗が渡米して一番驚いたのは、「アメリカでは、すでにテレホンが普及して、商店の主人が壁に向けて大声で喋っているのを見て、何をしているのか解らず、アメリカ人は皆狂人」と思ったそうだ。

市朗が持ち帰った当時のサンフランシスコの情景を写した写真帖は、中大屋文書の一部として、県立博物館に寄託してあるので、当時を知りたい方は、博物館で閲覧が可能です。

市朗と同じ船便で渡米した著名人は、尾崎岳堂氏・後に日本画壇で「南画の大家」として著名な、小室翠雲画伯・明治生命社長の藤田氏がいる。

執筆者 星野 喜忠
協力者 井上 文次郎

気迫の画家 三枝 茂雄

三枝芸術は正に、不思議な世界である。私は時々「この作品は絵として見るのか」又は、「書として見るのか」と迷うことがある。三枝先生は画家でありながら、書には造詣が深く、特に中国の書聖といわれる、王羲之、顔真卿、懷素、石濤、日本では空海、良寛などの古典を現世を超越した、鋭い目線で臨書された。



書は三枝芸術を語るには、これを除いて考えることは不可能なほど、重要な位置を占めている。妖気のただよう絵と書の力強い、或いは柔らかい線とが一体化して、独特な世界を醸し出す。このような三枝先生のことを「気魄の画家」とか「孤高の画家」又は「妖気のただよう画家」などという人が多い。私も同感である。さて私にとっては、兄のよ

うな、ある時は父親のような存在であった、三枝茂雄先生は、大正九年に甲府市に生れ、四歳から書を始め、十三歳ころからは、文字、歴史、仏教、俳句などに親しんだ。十六歳の時、叔母から「美術全集」を贈られたことが、先生の美術への道を決定的なものにしたようだ。

その後、東京美術学校（現東京藝術大学）の日本画家を受験したが最初の年は合格しなかった。その後の猛勉強により翌年はみごと首席で合格した。先生は受験の前日、自分で絵の具を溶き、これを入れた「おかもち」を持って美術学校へ行った。先生はこの時の着物を一枚のスケッチとして残している。



希望が叶い、期待もして入った美術学校だったが、指導者の伝統的な技術を中心とした講義等には充分な満足を得ることが出来ず、先生の足は美術学校の図書館に向かったようだ。そこでは前出の中国の書家はもとより、北宋時代の画家、馬遠、夏圭、梁楷などの作品を画集を通して、心ゆくまで視ることが出来た。中でも金冬心（金農）や石濤、北魏時代の龍門二十品、には特に心を引かれたのも、この時代である。

先生は昭和十八年九月に美術学校を繰り上げ卒業しているが、その翌十月七日に画いた、水墨画の賛は、この時すでに、龍門告像風の書体で書いている。



美術学校卒業の折には、先生にとっては、最も居心地の良かった、図書館の前にと土下座して「ありがとうございました」と礼を言ったと私は聞いている。同年十一月には中国南京の日本中学校に、教師として赴任したが、戦火が厳しくなる中、昭和二十年現地にて応召、中国各地を転戦中、左眼を失明した。先生は隻眼となったものの、翌年無事帰国した後、昭和二十四年十一月、県立都留高等学校に赴任した。先生の都留校在任中の教え子や大月市民の美術愛好家の皆さんに多大な影響を与えた功績は誠に大きく評価されている。

この年から昭和四十八年、甲府第一高等学校を退職するまでの二十四年間は、正に三枝芸術の円熟期となった。



無用之助

昭和二十五年には国画会に初出品した油絵「夜話」と「世界」が受賞となった。この頃の先生の油絵製作への情熱は、文字通り、「眼光紙背に徹す」そのものであった。三枝芸術が、書画一体の境地の中で、多くの人々を魅了した物に、俳句がある。先生は旧制中学校時代から、飯田蛇笏氏主義の「雲母」に投句していた。

先生の俳句への関心は、書画にも匹敵するもので、二百編近い俳句を詠まれた。今度、静代夫人とご長男の茂人氏の尽力により一九二〇〜一九八九年迄の俳句を収めた、句画集「阿吽（あうん）抄」が刊行された。この句画集が世に出たことを、心から喜んでいるのは、三枝先生自身であると私は確信している。お二人の希望もありその中より十句を以下に記す。

ひそみやり
雲（くも）の峯（みね）五
蘊盛苦（ごうんじょうく）
とたち昇（のぼ）る

秋立つや富士に四方（よも）
の嶺臣（ねしん）と伏す
團栗（どんぐり）に疎外の
肩を搏（う）たりけり

葉を掃（はら）ひ樹（き）
は本然（ほんねん）の冬に
佇（た）つ

鶯（とび）舞ひて寒碧天（
かんへきてん）に顔（ひび
き）あり

松に霧げに水墨の古金欄
人死して石より重き雨が降
る

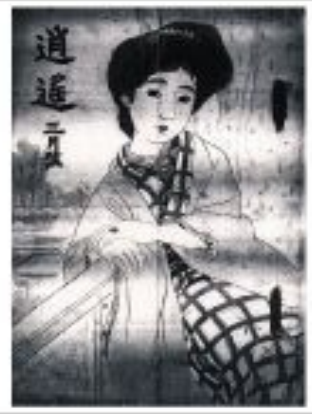
焰畫（ほむらか）くはおの
が葬（ほふり）の備（そな）
へかな

執筆者 仁科 義民

明治二十九年一月に富浜村の宮谷で生まれ、昭和七年一月、三十七歳で死去した長田俊興は、最近注目を集めてきた猿橋町出身の詩人吉川行雄の恩師であった。



請われて処女詩集「郭公啼（かっこうな）くころ」に序文を寄せている。余りにも短い生涯であったが、残された日記や資料をみると、悔いのない充実した一生であったと思われる。旧制の県立都留中学校在学中に、手書きの同人週刊雑誌「逍遙（しょうよう）」を発行し、関東は言



うに及ばず関西、そして遠くは朝鮮まで誌友が広がっていた。四年生の時（今の高校一年）長田酔花のペンネームで執筆している。

葉桜 長田酔花（前略）それは深いわけがあるさ。山本の教科書をあけるとね

「誰が？
＼だろ。そうすると女に宛てた写真が出たのだ。封筒に入れて上には「美子様」と書いてあったそう。虚談だろうか？
虚談なものか。その騒ぎに皆行って見たのだ。仲々彼も面白い事をやるではないか。大正三年八月、「逍遙」七月号の「卓上より（長田酔花）」をみると、

「早くも世は七月となった。前には暑中休暇と言う長い自由な時間が迫っている。然しそれ迄には我等を試す試金石一即ちエグザミネーションがある。私の学校でも十三日頃からはじまるだろう。それ迄には三角、幾何、英語などの小試験もあるとのことで忙しいのだが」と言って本誌発行を延期するのは予の忍びざる所である。」
旧制中学の四年生で、学業にかかわる心配をしながらも、平然と自らが編輯する同人雑誌の刊行を考えていたのである。
大正四年都留中学校を卒業した俊興は、山梨師範学

校本科二部に進学、大正五年卒業と同時に猿橋小学校に訓導（今の教諭）として赴任した。

日頃から文芸活動に意欲を燃やしていた俊興は、同僚の教師や児童たちに創作活動をすすめて、「路上」という詩集を発行し廻覧している。この中で俊興は、「草堂」のペンネームで「卓上より」を書いている。

「一たび高一の教室を訪れた人は、他教室と違って何処となく言い知れぬ優美な感想を抱くであろう。つまり四枚の小黒板に記された文壇の威力であろう。私たちはそうした教室に毎日勉強しているのだ。美しい心を持った四十七人は実に高一詩社の中堅であるのだ」
高一は、昔の小学校の統制にあった二年制の課程で、高等小学校と呼ばれていた。大正九年一月、俊興は葛野小学校に転任。今と違って当時は、年度の途中で転勤することがあった。この頃から俊興は教育指導ばかりでなく、色々な面で力に自己主張をするようになり、多彩な活動をしている。

でしばしば演説しながらも自らの文芸活動を推進した。「文章倶楽部」や「文星」、山梨の教育機関誌であった「山梨教育」などに果敢に投稿している。

ここで、副題とした俊興の「坊っちゃん」的な要素を大正九年の「日記」から拾ってみよう。

一月一日大正九年を迎ふ。一機一転す。昨冬転任したれば浪人的の正月を迎ふ。空あく迄澄み初日の光まことに濃やかなり。九日猿橋小学校告別式に於て三十分間挨拶す。児童も泣きて呉れたり。十日葛野小学校に出勤す、新式にて約十五分間挨拶をなす。
十二日新しく建設をなすべく本日より授業にとりかかる。訓示（態度・教育・学術・綴方）をなす。二月二十六日算（考査）地（アフリカ州）読（辻音楽）大演説Ⅱ「改造と青年」於葛野青年会、大拍手裡に終る。三月八日散髪屋にて丸刈りをなす。十日吉田県視学への公開状山梨日日新聞に掲載。二十六日卒業生茶話会に臨場して「身体・不平」と題して小演説をなす

五月十日新調の下駄にて登校す。遅刻す。頭痛して心地わるし。二十四日修（仁と勇）読（駱駝乗・らくだのり）体（尋三）理（たんぼ）唱（日本人）。今朝牛乳を飲みし為か心地よ

し。二週間ばかり遅刻せず満足なり。六月四日昨日駒下駄を求めしが朝より雨ふる。瓜皮をつけし足駄にて登校す。八日夏服に新調カラ、カフスをつけて着用登校す。児童の目をひく。二十五日色（茶色）眼鏡をつけて登校す。算（面積）読（雨と風）高一地（印度）歴（大化改新）俸給日、金五十二円七十銭受取る

七月二十日祭来る。五ツ紋つきの羽織袴（はかま）にて登校（三日間紋つき）九月九日頭痛せり。妻をほしと思うこの頃。十月八日新調の靴にて歩くに心地よし。十六日踏みはた音を後にす。二十五日運動会（級旗ひるがへる（尋五のみなり）、学校に泊まりぬ。二十七日床屋により角刈りをなす、沈黙したり、終日沈黙したり。十二月三十日妻ほしと思う夕べのさびしくも、年逝くことはうれしきれぬ。二十五歳は終り行くかな

× × 当時の小学校は尋常とい、その上に高等科が二年であったが、尋三や高一などの補欠授業に出張していた。翌十年の日記をみると、尋六の持ち上がりが予想されていたが、突然「受持変事す、高等科二年なり（明日より）」新調したゴム靴をはいて登校した四月二十八日のことであった。

この後俊興は、上野原小、四方津小へ転勤し、昭和三年、三十三歳で強瀬小学校の校長に任命された。この時の意気込みは、残されている「強瀬文壇」の「第一声」と題する巻頭言に読みとれる。「『強瀬文壇』は強瀬児童の雑誌だ。強瀬には強瀬の個性がある。個性のある所に、存在の意義が成り立つ・・・いざや、相共に創作しやうではないか。」

このように、充実した教育経営と並行して多彩な文芸活動を展開していたが、三十七歳の若さで惜しまれる生涯を閉じたのであった。
資料提供 長田富治
執筆者 井上 豊

財政再建団体から黒字化した唯一の大月市長 第八代 井上 武右衛門

大月人物伝 歴史 探訪

昭和五年六月大月町会議

員、同九年再選、更に同十

年には県会議員選挙に出て

当選、北都留館購買販売

利用組合長、県信用販買購

売組合専務理事、大月町長、

同農業会長、郡町村長会々

長、戦時中大政翼賛会政治

体制協議会構成員であった

関係上公職追放、二十六年

八月解除と共に各方面に活

躍、昭和三十二年二月大月

市長に当選、市政の向上に

寧日なく活躍した。

井上は最初の市長になっ

た時の市政方針演説で次の

ように言っている。

・市政の主人公は市民であ

る。

・税金をいただいている市

民の批判を受けぬよう市民

に最高のサービスを提供す

る。

・無駄の排除と節約が行政

の要である。

・前市長時代の財政再建計

画は完全実行を図り内外の

信頼を回復する。

・大月市の発展は、唯一、

首都東京への接近である。

その為、国土開発、縦貫自

動車道、中央線複線化が私

の最大のビジョンである。

十年後は東京との距離を一

時間で結ぶ事が私の夢であ

る。

この様に井上は論旨が明

解で将来を見通した考え方

をもっていた。また彼は市

役所職員に対する訓示でも

こう言っている。

・君たちは公僕であるので

市民に対し、親切な対応を

すること。

・どこまでも自己の責任を

完遂すること。

・プロとして法令規の研究

を極めること。

・日常生活では礼儀と秩序

を保ち節度をわきまえるこ

と。

・出勤時間は厳しく勵行す

ること。

これを聞いた当時の部下

達は市長の厳しさに終始緊

張感をもって臨んでいたと

いう。

こうして井上は笹子新隧

道の開通、中央線の複線化、

国、県道の改良舗装、中央

自動車道の早期実現などの

推進者となり新規土木機械

の購入、簡易舗装の実施、

バス路線の増設、土砂防止

工事等を施行して交通網の

整備発達図り、地域産業発

展に寄与した。また郡内機

業振興の為に生産設備の改

善と機業合同を進める傍ら、

経営合理化及び近代化、資

金貸付制度を創設して生産、

流通両面の円滑化に努めた。

昭和三十四年、五年の末

曾有の台風災害の復旧。市

民生活の健全化、環境衛生

の向上の為に上水道の拡張、

改修、簡易水道の敷設、診

療所の運営、塵芥車と尿尿

車の配備、火葬場の整備等

を図った。小、中学校の統

合、校舎の新築、屋内体

育館の建設、プールの新設、

スクールバスの設置等、施

設、設備の拡充を図り、更

に短期大学に附属高校を設

置して、大学運営の刷新、

巡回文庫の実施等教育振興

に心血を注いだ。

氏の行った業績をなお紹

介すると次の様な次第であ

る。戦後、厚生省の国民健

康保険法の制定の審議会委

員に就任。戦後の食糧不足

の折、備蓄米を放出して上

野原、吉田方面の住民まで

これを配給、市民に感謝さ

れた。大月駒橋出身の小宮

悦造東京医科大学学長の協

力をえて、済生会病院を大

月市立総合市民病院に発展

させる。大月市が再建団体

に指定されて苦しかったと

き、企業誘致を積極的に行

いこれを二年位で解消した。

現在の中央道誘致にさいし

自からの広大な土地を提供、

開通の促進を図った。大月

ロータリークラブ初代会長、

明治学院大学の同窓会長を

長く務めるなど同校の発展

につくした。

彼のこうした社会的活躍

にさいし、家において、夫

をたすけ家を守った妻広子

は、富士吉田市新屋の名門

堀内敬治氏（屋号釜屋で酒、

醤油等の製造）の二女（現

富士吉田市長堀内茂氏の伯

母）で、県立甲府高女から

日本女子大学国文科に学ん

だ秀才で昭和三年に井上家

に嫁いだ。

八代目は趣味として読書

と思索、特に勸世流の謡曲、

仕舞、囃し等をよくし、時

に宗家を招いてこれを楽し

むといった余技もあり、こ

こにも氏の風格が窺い知ら

れる。

昭和四十四年四月十四日

七十一歳で他界した。

現在の井上家当主の一男

は父と同じ明治学院大学卒

業後、父がつくった大月短

大附属高校の教師の後、井

上家を相続、社会的には多

くの役職を経て山梨県教育

委員会委員長に就任するな

ど県下教育界でも活躍した。

一男の弟、次男は曾祖母

の実家がある高遠城主諏訪

家で相続人が絶えたため、

秀才のほまれ高かった彼を

諏訪家の相続人としたがお

しくも十九歳の若さで没し

た。

参考資料

山梨日日新聞社発行「同窓

都留高のあゆみ」

資料提供 親族

執筆者 山口 善久

協力者 星野 喜忠

日中戦争下、反戦放送をした 非戦平和主義者 長谷川テル

最近テレビや新聞にて放映・報道される大月市出身で、戦中活躍された異色の人物の一人に長谷川テルがいる。

テルは、明治四十五年（一九一二年）三月七日、父幸之助、母よねの次女として、大原村猿橋一九七番地（現大月市猿橋町）に生まれた。



父幸之助は土木技師として、東京電燈株式会社（現東京電力）駒橋水力発電所に母よね・姉ユキと共に赴任してきた。その後短い間であるが父幸之助は八ッ沢水力発電所（現上野原市八ッ沢）に勤務された記録が「八ッ沢水力発電所送電日誌」にあり、姉西村ユキさんの記憶に「上野原在」とあり、テルも二ヶ月の間ここに暮らしたとも思われる。父の遠縁には吉永小百合の母和枝・その妹川田泰代がいる。彼女の戸籍名はテルの照子である。出生時のテルの住まいは、吉川倉太郎氏の貸家で建物は東に面し、間口五間奥行き三間の二階家で「当時としては洒落た造作で有った」と言う。（佐官士北野光善翁談）

また人家はまばらで、南側は、百瀬呉郎の屋敷、西は猿橋小学校の校庭、その向こうは数頭の牛が飼われている耕牧舎だった。北側は小高某の屋敷、その北は路地で桂川の崖際に、登記所・照原医院があった。

長谷川夫妻は「無口ないたって大人しい人柄だった」と百瀬家の小坂ハルさんは話していたそうだ。

翌大正二年十一月に、父の転任により、東京市赤坂台町に移転、猿橋でのテルは赤子で知る人も、近所の小坂ハルさんくらいだった。翌大正三年八月に父の勤務上で、埼玉県山口市に転居、大正八年山口小学校に入学。翌大正九年に所沢小学校に転校。大正十年夏、東京に移転、淀橋区柏木町一〇〇二に転居、淀橋第四小学校に転校した。また翌大正十一年に代々幡町幡ヶ谷八五〇へ移転。笹塚小学校へ転校。大正十二年笹塚小学校卒業、東京府立第三高女（現駒場高校）に入学。昭和四年第三高女を首席卒業。東京女子大と奈良女子高等師範学校（現奈良女子大）を受験、両方とも合格。後者の奈良女子高等師範学校に進学、寮生活を始める。

奈良での生活は、テルが夢見たほど文学的な学校ではなく厳しい校則にしばられ、好き嫌いの激しいテルはうんざりで、文学の世界に逃げ込んで行った。

のどかな学園生活も次第に時代の荒波が押し寄せ、満州事変の勃発は軍国世相を反映、思想問題についての締め付けが厳しくなり、自由に認められていた研究会も禁止され、テルが中心となつて作つた短歌会も解散させられた。急速に台頭するファシズムに背を向けたテルは、反ファシズムの文筆活動に新しい希望を見出した。ここでテルは、国際語エスペラント語を学ぶこととなった。

昭和七年八月奈良から帰京したテルは、姉ユキが所属していた日本エスペラント学会の夏季講習に参加したり、父と弟弘・姉ユキを交え、社会や思想問題で話し合ったり自由に議論する進歩的家庭で在ったが、父親とは思想について衝突し反抗的であった。九月十一日奈良に帰ったテルは、警察署に呼び出され拘禁された。テルは一週間で釈放されたがその結果、卒業できず女高師から退学処分を受けた。

昭和八年一月「タイブライター」学校に通学、三月卒業。日本エスペラント学会に無給で勤務。五月にエスペラント研究会の会員となり、「エスペラント文学」



長谷川テル・劉仁の墓

の創刊に参加。テルはエスペラント語で文筆活動を再開、第一号が小林多喜二の「蟹工船」の抄訳発表となった。

○「劉仁」との出会い
昭和九年（二十二歳）NHKアナウンサー第一時試験合格。就職せず。昭和十一年、東京高等師範学校中国人留学生劉仁と結婚。昭和十二年、夫とともに上海に渡り、インターナショナル

な立場から抗日・反戦運動に参加。武漢・重慶をはじめ各地に居を移しつつ文筆活動、放送を通じて日本軍兵士に反戦・平和を呼びかけた。そのため日本国内では「蟻声売国奴」の汚名を浴びせられ、彼女の父は辞職（東京市）を余儀なくされ、実家は投石された。

昭和二十年（一九四五）の日本の敗戦後もテルに平

和は訪れなかった。国民党・共産党の内戦が熾烈さを増したからだ。四十六年に当時の解放区にたどり着き、翌年になって一家は東北のジャムスに移動、其処で東北社会研究所の研究員に夫妻とも任命され、ようやく安らぎの生活を送れるようになった。

昭和二十二年四月十日、妊娠中絶手術の感染症で死去。四十七年一月十四日の新中国の誕生を見ることなくテルはこの世を去った。享年三十五才。次いで四月二十二日、夫 劉仁も肺水腫にて死去。（享年三十七才）夫妻は佳木斯の東北烈士公墓に葬られる。

○非戦平和の

中国大陸に渡ったテルは、平和の使徒であり、戦後日中友好の先駆者でもあった。彼女は祖国日本と隣国の中国が平和であることを念願しながら、中国大陸での日本軍の組織的な腐敗とその犯罪行為に毅然として抵抗した女性であった。その正義感と反逆的な思想と行動は東洋のジャンヌダルクとも言えるであろう。

○功績讃える碑文
テル終焉の地ジャムス郊外のテルの墓は、中心街より、車で小一時間、小高い岡の上に二メートルほどの塔のような白い墓石がまる立ち、二つをつなぐ金色の

プレートに「国際主義戦士 緑川英子（テルの別称）」、「劉仁同志の墓」と刻まれている。裏側にはテルの功績を讃える碑文がつけられ、結びに「佳木斯（ジャムス）人民政府一九八三年七月十一日立」と記されている。

彼女は碑銘通りのインターナショナルリストであった。しかしそれは心から祖国日本を愛したからでもある。戦前、戦中、彼女を非国民・売国奴と罵り、投石した自称「愛国者」たちと彼女とどちらが日本人としての誇りを堅持し、真に愛国的であったかは歴史が明かにしている。残念ながら日本ではテルのことはあまり知られていない。だがジャムスでは小学校でテルのことを教わったと言う中国人は多い。テルの墓のある一帯は緑川公園と呼ばれ顕彰されている。

○遺族 長男劉星・長女劉曉嵐（長谷川曉子）
○長谷川テル主作品 「蟹工船」抄訳「虫めずる姫君」（堤中納言物語りの一編）「日本婦人の状況」
「国共合作について」
参考文献 長谷川テル編集委員会編・長谷川テル作品集
執筆 井上文次郎

大月「雲母」俳句の草分け 俳人「加藤岳南」

本名加藤幹雄。明治二十八年七月八日生まれ。本籍地は新潟県岩船郡村上町である。祖父豊寛の代に郷里を出て、大月に移住。豊寛は明治十五年には笹子小学校、二十年には畑倉小学校、三十四年には強瀬小学校の校長をそれぞれ勤めた記録が残されている。

父振之丞についてはその動静は不明であるが、明治二十七年十二月二十八日、飯岡村強瀬の高橋善平の二女登美と結婚した。翌年幹雄（岳南）が生まれ、明治三十二年には長女富美が生まれている。



幹雄は明治三十九年強瀬小学校を卒業、四十三年三月に猿橋小学校高等科を卒業、同年四月に県立都留中学校（現都留高校）に入學、大正四年三月卒業、同年四月師範学校本科第二部に入學、同五年三月に終了、三月三十一日猿橋小学校教員に任命される。同六年十二月俸十九円を支給される。大正十四年三月三十一日、

畑倉小学校訓導兼校長となる。訓導は今の教諭と同じで、校長ではあるが授業も教えていたのである。この年、十二月十三日妹の富美は、千葉県の横田某と結婚したが、その五日後に幹雄は、静岡県出身の山田某の次女信子と結婚した。翌年長男一雄が生まれた。

幹雄は、中等教員の国語科、漢文科の検定試験に挑戦して免許を取得し、都留高等女学校、都留高等学校の教諭として教鞭をとった。さて、幹雄が岳南の号で俳句の世界に入ったのは大正五年教師生活の開始と同時である。飯田蛇笏（だこつ）が主宰する「雲母（うんも）」に参加し、誌上には大正七年の雑詠三句が初出である。昭和三十九年九月に「雲母同人」となり、益々句作活動に専念した。



岳南には、自筆の「岳南句集」を含めて七巻の句集があり、一六八七句が残されている。

次に、筆者の視点から選んだことをお断りして紹介してみよう。

岳南第一句集（大正七年より昭和八年まで、四九三句所収）

肥料場に乾きて麦の青さかな
大正七年

夕空を影濃く落ちし一葉哉
（かな）
大正九年

花御堂しつらふ僧の朝日かな
大正十年

掃き終へて佇（たたず）むところ八重椿（つばき）
大正十二年

我を見し馬の眼やさし秋の風
大正十三年

寺寂（じやく）とただかくはしや榎（かや）の雨
大正十五年

はればれと夜は星空の刈田かな
昭和二年

曇り日の暮色となりぬ葱（ねぎ）の花
昭和七年

岳南第二句集（昭和九年より昭和十六年まで二五二句所収）

髪洗う妻に日向の水仙花
昭和九年

天日のどかとかげりぬ冬の雲
昭和九年

青みたる遠桑畑や春の雨
昭和十三年

臆（おぼろ）月風見は固く静もれる
昭和十五年

岳南第三句集（昭和十七年より昭和二十八年まで二四七句所収）

別荘を出（い）ず背高き娘
（こ）青すすき 虚子選
昭和十八年

冬草に淡（あわ）くなつかし影法師
昭和十九年

松葉牡丹（ぼたん）塵（ちり）もとどめず寺の庭
虚子選 昭和二十一年

山よりの狭（さ）霧にうるむ曼珠沙華（まんじゅしゃわ）
昭和二十三年

稲の香や暮情にむせぶ新居の灯（ひ）
二十八年

岳南第四句集（昭和二十九年より昭和三十年まで六五句所収）

鱒（いわし）雲山は疲れの色を見せ
昭和二十九年

邑（むら）に入ればすく機（はた）音や秋の雨
昭和二十九年

昭和三十年九月より「雲母同人」となる。

岳南第五句集（昭和三十一年より昭和三十三年まで一三七句所収）

秋晴れのつづく北窓幽（かす）みをり
昭和三十年

飛ぶ蝶のうす墨いろも高曇り
昭和三十年

早（かん）天の痴呆の月を視つめ居し
昭和三十年

岳南第六句集（昭和三十四年より昭和三十五年まで一六三句所収）

さまざまの切り石の黙（も）

だ）うす霞
昭和三十四年

岳南第七句集（昭和三十六年より昭和四十年まで三三〇句所収）

蔵の窓人が住む灯も年の暮
昭和三十六年

紙屑のごとき残雪離（かき）光る
作品集
昭和四十年

昭和十四年、加藤幹雄は従七位に叙せられ十九年には従六位に叙せられた。

昭和二十七年に都留高等学校を退職してからも、都留高等学校、大月短期大学附属高等学校等の講師を勤めた。

昭和四十年三月二十五日に死去した。俳句は、雲母を主宰していた蛇笏に終生師事し小俣竹友などと共に、大月雲母支社の興隆と後輩の指導に力を入れた。

上の手紙は岳南が蛇笏の経歴について質問したのに対して旅行中だった蛇笏に代って龍大が返事をくれたものである。

執筆者 井上 豊



大月市出身で、異色な斯界で著名な人に、日本甲冑・武具研究保存会会長藤本巖がいる。

藤本巖は、大正五年十二月二十七日、父義盛・母幹尾の長男として、大月市猿橋町藤崎に生まれる。

藤本家は、甲斐源氏小笠原長清の十男藤崎十郎源行長の後裔で、屋号を「藤崎の大屋」と言い藤本巖は三十五代の末裔です。

「甲斐国志人物部第四、小笠原長清の項に」

「行長 十男 東鑑正嘉中の射手に小笠原十郎と見ユ。又藤崎十郎と称ス。法名光念、藤崎は都留郡の地名なり。」

浄土真宗福泉寺の坊守の記述によると、

①藤崎の大屋では、その墓地に古い五輪塔があり、太祖先光念の墓と刻まれ、代々行長の子孫と語り伝えられて来た。

②長篠の合戦に郎党と共に従軍したと言う文書が残る、甲斐国で武田氏が栄えていた頃までは、土着豪族としてかなりの勢力があった。

③度々の大火のあと、現在の小田の中央平地に移り、土地の大名主として、経済的にも文化的にも、地域のリーダーであったと思われる。

④天和三年、芭蕉が谷村流寓の途次、藤本家にて土地の俳人達と俳諧を愉しんだ。

『月刊 武道』二〇〇七年六月特別増大号「顔」で、藤本巖を次ぎのように紹介している。

■甲冑・武具の研究を始め

たきっかけは？

「私は、甲斐源氏小笠原長清の十男藤崎十郎源行長三十五代の末裔で、長男でしたので、初節句のお祝いに武者絵の掛け軸を二十幅余頂きました。前九年役の源義家、源義経鴨越、楠木正成など、幼い時から祖母にいろいろ武勇伝や逸話を聞かされて育ち、全部、空で覚えしました。それで甲冑や武具が好きになり、いつの間にかこの道に入ったというわけです。」

■日本甲冑武具研究保存会とは？

「昭和三十七年に日本甲冑武具保存会が結成されて、四十二年に、社団法人として国から認可を得た。初代会長は赤城宗徳先生で日本武道館の理事長と言う縁で、事務所は日本武道館に置いてあります。初めの頃は、めいめい自前の鎧や具足を持参して、鎌倉、室町、江戸時代の甲冑が入り乱れて、ちくはくととなり、進行台本もなかったため、手順を忘れたり、いろいろなことがありました。」

また 国の要請を受けて、海外で展覧会を開催し、ベルギーのユーロパリア89での大名展について、名譽総裁となられた天皇陛下の茶餐会に招かれ、奏上の光栄に浴し、励ましのお言葉を頂戴する榮譽を受けたことは生涯忘れられません」

■甲冑・武具研究の面白さ

保存の苦心談は？

「現在、会では、年数回、甲冑や武具の審査を行っています。昔、武道館で審査会を実施した時、全国から二百点以上の甲冑が持ちこまれ、二日がかりとなった。

審査は、大変ですが非常に勉強になる。例えば「赤革威大鎧」と言う平安時代の貴重な鎧が岡山県で発見され、後に国宝に指定され、こう言う国宝・重文の発掘は何よりの成果でした。

普通、絹糸威の古い鎧は、風化して、手を触れるだけでバラバラになってしまいます。つまり、甲冑をただしまっておくだけでは傷んでしまうため、貴重な文化遺産の保存には、甲冑師の技術を絶やさぬよう、修復や復元の機会を作つてあげることが重要です。今後は、文化財の保存と併せ、技術の伝承を継続的に創出する仕組み作りが必要です。」

■甲冑・武具に込められた武士の美意識とは？

「本来、甲冑・武具は、飾り物でなく、生死を分かち戦場で武士が身に付けて戦うための実用品であり、死に装束でもありました。そこには日本人の知恵が凝縮しており、鉄や革、繊維などの素材が身体になじむように組み合わせられて出来ていながら、武士の華といわれる見事な造型や色彩、装飾など、魅力に満ちあふれています。」

■後進へのメッセージと今後の抱負は？

「私は、これまで、四、八七一点の甲冑の審査をやってきました。とにかく、実際に場数を踏んで見て勉強する事が一番です。まずは、たくさん鎧や兜、武具を見て、好きになって欲しいのです。愛着が湧けば勉強するようになり、甲冑・武具への理解も一層深まります。そして展覧会などでもっと若い人にその魅力を知ってもらい、甲冑・武具の理解者を一人でも多く増やしていきたいと思えます。」

■「山本勘介の謎を解く」

渡邊勝正著に序文

藤本巖は又武田家旧恩会副会長として、山本勘介の出自について、安芸武田家との関連を研究発表された上記の著書に序文を寄せ、

「歴史上、史家により架空の人物とされて来た勘介が、『市川文書』の発見により、今や実在の人物として『NHK大河ドラマ』でも放映され、出生地は駿河か？三河か？諸説が在る。

今回渡邊勝正氏の研究の結果、讃岐で生れ、安芸武田を滅した大内軍に属した勘介故、一門甲斐武田で出自を隠し通した。長州の毛利文書「國聞録」(家臣録)に山本勘介の名がのこされ、子孫が判明している。」

これは勘介像の新分野を切り開いたものと言える。

参考文献

「武道六月特別増大号」

「郡内研究第4号」

「山本勘介の謎を解く」

執筆 井上文次郎

「大月人物伝」発刊のお知らせ

いつも「住まいル新聞」をご愛読いただきましてありがとうございます。本誌にて平成18年5月より掲載しました「大月人物伝」を「心に舞う」シリーズ第五回目として、製本発刊させていただきます。

ご希望の方は先着500名様に無料進呈を致しますので下記までお申し込み下さい。
TEL0554-22-2500 FAX 0554-22-5234



水戸藩に仕えた幕末の数学者、落合周八郎俊明は、落合家の次男として、寛政年間、甲州郡内領葛野村（現大月市七保町葛野一五七六落合孝一郎方）屋号は大屋に生まれる。幼少の頃天童と称され寺子屋で学問に励み、成人して甲州に文化年間遊歴してきた「最上流」の数学者、安永惟正に師事し弟子となり数学を学び筆頭となった。

佐藤健一氏の著書、『甲州一揆・犬目の平助逃亡記』によると、

教育熱心な甲州人 庶民の教育は、普通寺子屋で行われ、その数が多く内容は「読み、書き、そろばん」という実生活と直結したものであった。子供達は年齢に応じて友達と遊んだり、家では祖父母・父母、兄弟を通して家事や家職を見習って成長したが、これだけでは一人前の人間として不十分で、文字が読め、書けるようになれば、「そろばん」を使い四則計算を習った。江戸時代は学校制度は公的になく、各藩で必要性を認めれば藩校を設置した。藩校への入学には、第一は藩士は藩の命令で、年齢に達すれば入学する。

第二は、藩士の自由意思での入学。平民子弟でも入学が許可される所もあり、農民の子弟は入学が許されなるところもあるなどさまざまであった。創立年代は、天明・寛政年間（一七八一〜一八〇〇）が群を抜いて多い。この時期は各藩とも教育の重大性を認め、藩士を教育することが藩政を立て直すとの考えであった。日本の総人口の八割を占める農民も、寺子屋に通い、『農業従来』や『そろばん』の本を教科書として、六才ぐらいから六年あるいは十二年間学んだ。「そろばん」で四則の計算が出来るようになる」と開平法や開立法を学び、金銀銭の間の両替の計算や利益の計算、年貢の金額の計算など練習した。甲州は国中、郡内を問わず、米作以外の収入の道があり、江戸の市場に出荷していることから、他の農村には見られない都会を意識した雰囲気があった。

それが寺子屋・塾・郷学校、藩校などある理由の一つと思われる。甲府には学問所（徽典館）が、寛政年間甲府勤番与力富田富五郎の手で設置された。入学を許されたが天保十四年（一八四

三）から誰でも入学出来るようになった。

甲府の数学者は時給自足郡内に近い八代郡には曲学館という郷学校があった。石和教諭所で文政七年（一八二四）石和の揆代官山本大善が支配下の人々の教育のため、幕府に申請し設立した。

甲州一揆が終わり、間もなく代官が農民の教育に目を向けたのは、何故だろうか？石和の代官山本大善が幕府に提出した伺い書の中には、「山間の土地は生活に困っている人が多く、農業も未熟で、風俗も良くない。自分の支配地を廻村して、いろいろ手を尽くしたが思うようにいかないのので、学校を作りたい。」この考えは郡内の谷村代官佐々木道太郎も同調し、石和と同様に郷学校として幕府にお願い出たに違いない。教授内容が二つの郷学校が同じであった。郡内の郷学校は「興讓館」と言つ。天保十三年（一八四二）佐々木が手代の平塚平八郎の助けを借りて始めた。

文部省編『日本教育資料』（明治二十五年）によれば郡内には寺子屋は二十六軒があり、生徒二二九九

人、教師三〇人がいた。郡内の人口六万人、この数は村の主な家の子弟は寺子屋に通つたと推定される。

郡内では年貢を米で納めないこともあり、郡内織りによる収入もあり、商人と取引する家も多く、実用的な「そろばん」の教育をどの寺子屋でも行っていた。

江戸時代も末期になると、数学の世界も大分複雑になつて、我が国の数学レベルは当時相当高く、その解き方や表現法などもいくつも発見され研究されていた。現在の大学の研究室と同様にグループで研究が進められ、それが流派の形で存在していた。〇〇流、××流と言ひ、特に大きなものは関孝和とその子弟達の「開流」で全国的に普及していた。

甲州には「甲陽軍艦」という書がある。武田信玄を中心とする甲州武士の心講えや理想、軍学が書かれた本があり、その軍学を数学に置き換えると「甲陽算鑑」となる。「二一夭作」と言う大衆向けの数学書を著わし江戸で著名な安永惟正は、文化年間石和に遊歴し、数学を教えた。安永は「最上流」の初等数学書

「算法童蒙知律」の内容を取り入れた本を書き「甲陽算鑑童蒙知律」と称して文化十三年に刊行した。甲州には既にいくつかの数学書が刊行されていて初心者には理解し難いところが多かつたので、安永は弟子に自分の算法を教えて比較させたようである。その理由は甲州独特の三ヶ条の法

「大小切法」「金銀貨銭に甲金法」「量数に三升枘法」のことで他とは異なっていた。そのため「甲陽算鑑童蒙知律」は弟子たちの強い希望で刊行した。巻末で甲州の力のある弟子五人が跋文を書いている。郡内領葛野村 落合周八郎俊明・山梨万力村平松林語保定・同松本村 注連木左兵衛徳隆 辺見領谷戸村 三井五兵衛徳音 府城東石和駅 土屋重郎佐衛門正直 筆頭に落合周八郎俊明の名が書かれている。免許は文化十年（一八一三）ごろ受けている。また水戸藩にて数学の力を生かして仕えたと言われ、甲州では最も優れた数学者であった。葛野の福泉寺の話では、

水戸藩江戸邸で織物などを扱う役職に付かれていたとも言われ、詳細は不明である。また、江戸で寺子屋を開いていたとも言つ。葛野に住んでいた時にも弟子を取つて教えていた。犬目村の平助もまた落合に師事していたと言われている。

参考文献 真説甲州一揆 佐藤健一著より 「水府系纂」 茨城県立歴史館

執著者 井上 文次郎

訂正とお詫び この度、当社発刊の「大月人物伝」の文中、天野董平様のお名前を薫平と、志村令郎様の兄、哲良を哲郎と、村上雅則様のお名前を正則と、90頁龍太様を龍大とまた西室平様の顔写真を他の人と誤って掲載してしまいました。改めて訂正させていただきます。お詫び申し上げます。